

2021 年度宮城県青少年国際交流推進事業

「サマースクール宮城・女川」

成果報告書



令和4年2月
宮城県教育委員会

1 趣旨

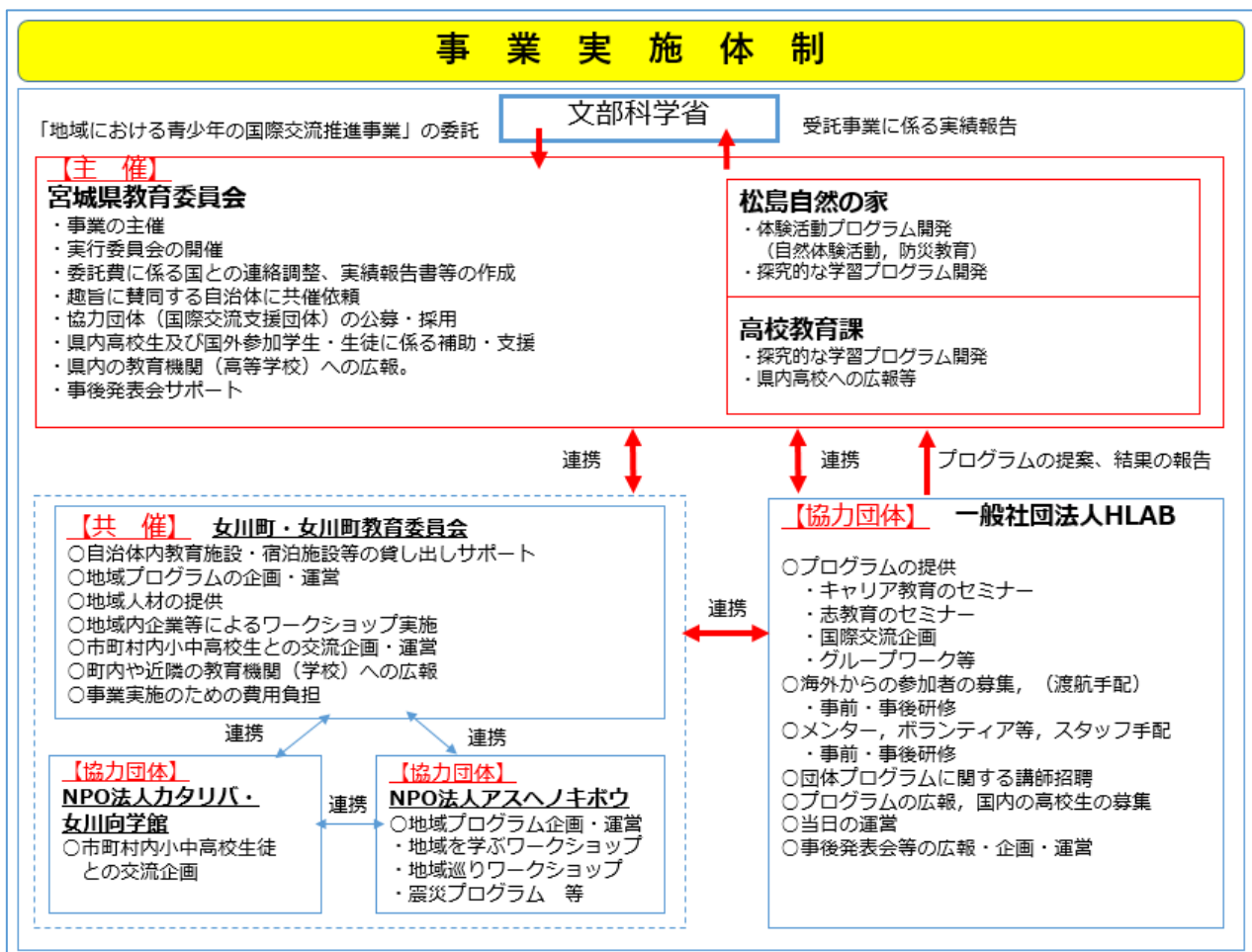
- 宮城県内外の高校生等に、「国境も言語も世代も超えた多彩な出会い」を通じて、社会性や労働観を養い、自己を見つめ直し将来を真剣に考える機会を提供するとともにその成果を普及することで、みやぎの志教育を推進する。また同時に、外国語に親しみ、外国語への意欲と語学力の向上を図る。
- これからの復興を担う県内外の高校生・大学生が、海外の大学生に、現在の復旧・復興の様子を伝えるとともに、今後の復興についてディスカッションすることを通して、将来の宮城のあり方について考える契機とする。また、本事業を通じて国内外に宮城の復興の様子をアピールする。

2 事業実施体制

(1) 実施体制

- ◎主催 宮城県教育委員会
- 共催 女川町, 女川町教育委員会
- 協力 特定非営利活動法人 アスヘノキボウ
認定特定非営利活動法人カタリバ コラボ・スクール 女川向学館
一般社団法人 HLAB

【事業実施体制図】



(2) 主催・共催・協力団体の役割

本事業は、「女川町」及び「女川町教育委員会」と共催するとともに、国際交流推進に係る各種プログラムを有する「一般社団法人HLAB」（以下「HLAB」）と連携して事業を実施した。また、女川町における企画内容の構築や全体のプロジェクト運営におけるサポート役として「特定非営利活動法人アスヘノキボウ」（以下「アスヘノキボウ」）、及び女川町中高生との交流企画運営役として「認定特定非営利活動法人カタリバ・女川向学館」（以下「カタリバ」）も協力団体として加わった。上記4団体と県教委とで実行委員会を組織し、適宜情報共有をしながら、それぞれの役割を明確化した上で、事業を推進した。

なお、宮城県教育委員会として、高校教育課並びに松島自然の家も実行委員会に参画し、自然体験活動及び防災教育、探究的な学びの観点からのプログラムの実施、県内高校への広報等に携わった。

①宮城県教育委員会

- 本事業を主催し、全体の取組の企画運営に責任を持つ。また、事業実施に必要な協力主体と連携し、企画の進捗管理を行った。
- 県内高校に、本事業に関する事前の広報活動を行った。
- 本事業終了後、主に参加者の通学する各高校で報告会を実施し、活動の認知度を広めた。

②女川町及び女川町教育委員会

- 本事業開催に際して、町の所有施設を開催場所として提供した。（女川町まちなか交流館等）
- 震災からの復興・復旧を目指す人々や地元企業に働きかけ、各種プログラムにその人材を提供した。
- 町内においては、町報での告知等、町内全域に情報が行き渡るよう積極的に広報活動を推進した。

③HLAB

- 本事業の実施に向けて、海外大学生や通訳可能な英語力を有する国内大学生をメンターとして組織化し、派遣した。
- 本事業の主たる企画及び運営を担った。

④アスヘノキボウ

- 女川町の人材や地元企業に働きかけて、地元の商店街や地元企業でのワークショップ等を企画した。
- 期間中のプログラム実施において、アドバイスやサポートを必要に応じて行った。

⑤女川向学館

- 女川町の高校生への広報、探究的な学習プログラムについての助言等を行った。

3 事業実施期間 文部科学省委託契約締結時から令和4年3月10日まで

4 年間スケジュール

○令和3年

7月9日（金）：第1回実行委員会（オンライン）

・実施計画詳細検討、会場等確認

・募集、広報等開始

- ・参加者（高校生）募集開始 ・運営ボランティア募集開始 ・各種プログラムのゲスト打診開始
- 7月10日（土）11日（日）：メンター等事前研修（会場：女川町）
- 8月2日（月）：第2回実行委員会（宮城県・女川町・HLABのみ：オンライン）
 - ・対面ではなく、すべてオンラインでの実施を確認（新型コロナウイルス感染症拡大の影響のため）
- 8月7日（土）～9日（月）
 - ・「2021 サマースクール宮城・女川（オンライン）」実施
- 8月12日（木）～15日（日）
 - ・「2021 サマースクール宮城・女川（オンライン）」実施
- 9月30日（木）：第3回実行委員会（オンライン）
 - ・振り返りと事後研修会についての検討
- 9月～1月：参加者所属校や、青年の主張等各種発表会に高校生が自主的に参加
- 12月1日（水）：第4回実行委員会（オンライン）
 - ・事後研修会へ向けての最終確認についての検討
- 12月19日（日）：「2021 サマースクール宮城・女川 事後研修会」（会場：女川町）
 - ・自主的な報告の発表会や町民との交流

○令和4年

- 1月20日（木）：第5回実行委員会（オンライン）
 - ・事前事後アンケート回収
 - ・反省会
- 2月21日（月）：第6回実行委員会（オンライン）
 - ・事前事後アンケートの結果の共有
 - ・次年度へ向けての課題の確認

5 「サマースクール宮城・女川」の実際

<p>○1日目 8月7日（土）</p> <p>10:00-11:00 開会式,オリエンテーション</p> <ul style="list-style-type: none"> ・挨拶 宮城県教育庁生涯学習課長 武田 健久 HLAB 実行委員長 田口 暦 ・祝辞 女川町長 須田 善明様 女川町教育委員会教育長 村上 善司様 <p>11:00-12:15 アイスブレイク</p> <p>14:00-17:00 セミナー</p> <p>17:00-18:00 G B s 企画</p> <p>19:30-20:00 オリエンテーション</p> <p>20:00-22:00 リフレクション・意見交流</p> <p>【開会式】</p> <p>参観者をオンラインでつなぎ、画面を通じて生涯学習課長 武田健久による主催者挨拶、実行委員長 田口暦の挨拶で「サマースクール宮城・女川」がスタートした。開催地女川町からは、町長 須田善明様、女川町教育委員会教育長 村上善司様にご出席</p>	<p>いただき、高校生や大学生に向けて、本事業を通して多くの学びを得られることへの期待など、温かいお言葉をいただいた。</p> <p>【セミナー】</p> <p>海外メンター8名との顔合わせや専門分野に関する説明・導入を実施した。</p> <p>【G B s 企画】</p> <p>海外メンターが英語をもとに簡単なゲームや大学に関する質疑応答などを行い、高校生との交流を図った。高校生が英語を正しく使い、間違えることを恐れずに、積極的に海外メンターと関わることを目的とした。</p> <p>高校生からは、緊張することなく、想像よりも積極的に関わったことや英語を生かしてのコミュニケーション能力が以前よりも増したことが述べられていた。</p> <p>海外メンターからも目的が達成されたとの報告が寄せられた。</p>
--	--

○2日目 8月8日(日)

10:00-12:45 セミナー

14:00-18:00 自己分析, 社会人フォーラム

19:30-22:00 リフレクション・意見交流

2日目は「いろいろな立場の方との交流を通じて様々な刺激を得る」ことをテーマにしたプログラムを実施した。

【セミナー】

海外大学生と日本人の大学生がメンターとして大学での学びについて英語でディスカッションするプログラムを実施した。多様なテーマの中から高校生は自分の関心に合わせて自由に体験することができた。高校生にとって、新しい興味分野を発見する機会となった。

【自己分析】

高校生参加者が大事にしたいことや価値を感じていることは何か、今後どのようなアクションを起こしたいのか等、ハウスの仲間や大学生メンターとの対話を通して、自分自身について考えるプログラムを実施した。対話をするうちに自分が本当に大事にしたいことや今後取り組みたいことを明確にするきっかけを得ることができた。

【社会人フォーラム】

各ハウスに分かれ、ゲストの紹介やこれまで取り組んできたことの紹介などを行い、高校生の感想の共有を行った。

○3日目 8月9日(月)

10:00-12:45 セミナー

14:00-18:00 大学生フリーインタラクティブ

女川紹介企画

19:30-22:00 リフレクション・意見交流

3日目は、これまでのプログラム等を通して得られた学びをもとに、「これからを考える」ことをテーマにしたプログラムを実施した。

【セミナー】

それぞれの分野のまとめと最終発表を行った。高校生からはこれまでのセミナーを通して、英語で発表する場面があった。

【大学生フリーインタラクティブ】

高校生から大学生に対して、大学入試や海外留学に関することや学習分野、日常生活の悩みなどに関する幅広いテーマで対話を実施した。

【女川紹介企画】

社会人として活躍されている方による講演とパネルディスカッションで構成されるプログラムを実施した。かまぼこ工場を経営しながら、復興に向けて地元女川をどのように元気にしていくかを考え、イベント等を誘致した実績のある高橋氏から高校生に向けて地域で生きる意味やアクションの仕方について熱いメッセージをいただいた。また、復興市場ハマテラス代表取締役の木村氏からもこれまでの取組について述べてもらった。

○4日目 8月12日(木)

13:30-14:00 再会式

・挨拶 宮城県教育庁生涯学習課社会教育専門監

千田 知幸

HLAB 実行委員長

田口 暦

14:00-16:30 学びの最大化企画

19:30-22:00 リフレクション・意見交流

【学びの最大化企画】

前半の学びを整理し、後半の学びに対する目標設定をした。自己分析やゲストの話を聞いて気付いたことや自分自身の得意不得意な点についてどのように伸ばしていくかを具体的な目標設定をした。

○5日目 8月13日(金)

10:00-11:30 Discover Onagawa

14:00-17:30 フォーラム

18:30-20:30 社会人フリーインタラクティブ

20:30-22:00 リフレクション・意見交流

【Discover Onagawa】

震災後、女川町にて起業した2名(石けん工房:厨さん, アスヘノキボウ:後藤さん)の方から話を聞き、これまでの苦労やさらにこの先向かう方向性などについて伺った。



【フォーラム】

NPO法人カタリバ代表理事今村久美氏より、東日本大震災後からの関わりや放課後学習支援の状況について、話を伺った。高校生からは今村氏がすでに大学生から活動していた様子についての質問もあり、NPO法人というものに興味・関心があるようだった。また、同職員の佐藤敏郎氏(元女川中学校教員)も加わり、カタリバとの関わりやこれまでの取組についても話してもらった。

【社会人フリーインタラクシオン】

女川町に在住又は関係のある方々の話を聞き、震災以降の活動の様子や高校生に期待することを自由に話してもらった。

○6日目 8月14日(土)

10:00-12:00 コンパスイワークショップ

13:00-16:30 応援企画

19:30-22:00 リフレクション・意見交流

【コンパスイワークショップ】

将来どのような人間でありたいか、何を成し遂げたいかを考える未来志向の自己分析を、大学生メンターの支援をもらいながら行った。その後、将来の方針(コンパス)について、それぞれが発表した。

【応援企画】

コンパスイワークショップで目標設定した将来の方針に対して、互いに応援メッセージを送り合った。(その応援メッセージの原稿については回収し、後日各個人に送信することとした。)

○7日目 8月15日(日)

10:00-12:30 まとめ企画

手紙企画

13:30-15:00 出発式

【まとめ企画】

感じたことや考えたこと、得たものなどを自分の言葉で語れるよう一つ一つのプログラムを振り返るとともに始まる前の自分と現在の自分を比較した。

また、互いに共有することで新しい発見や気づきがそれぞれ異なることを理解した。

【手紙企画】

期間中に話し合ったり、関わり合った人に対して相手の素敵なところや感謝を伝えた。さらに応援企画同様、郵送することで、終了後も高校生の手元に残る大切なものになると考えた。

【閉会式(出発式)】

13:00-15:00 出発式

・挨拶 宮城県教育庁生涯学習課長 武田 健久
HLAB 実行委員長 田口 暦
女川町教育委員会教育長

村上 善司様

・高校生代表挨拶

・感想発表

サマースクールの終わりであると同時に、参加者一人一人の新たなスタートの意味を持つことから閉会式=出発式と命名した最終プログラムを実施した。一堂が会しての成果発表会はできなかったが、参加者一人一人が自分自身の変化・成長を発表するとともに、今後の抱負を堂々と宣言することができた。そして、コロナが落ち着いた頃には女川町で再会することを約束した。



6 成果報告会

○参加者の成果発表

新型コロナウイルス感染症拡大の影響ため、対面での成果発表会は行わず、2つの方法で実践した。

① 参加者が在籍する学校等での発表

学校によってはオンラインによる自宅学習のみの場合もあり、身近な家族や友人への発表に留まる場合もあった。

<発表方法> 複数回答あり

- ・教室での成果発表（26人）
- ・作成したレポートによる発表（廊下への掲示，学校通信への掲載，友人への回覧）（12人）
- ・家族や友人への報告（オンライン発表を含む）（15人）
- ・できなかった（2人）

② 事後研修会での発表

令和3年12月19日（日）県内外高校生と国内メンターがオンラインで、サマースクール後の取組等について発表し合った。（県内高校生5名と国内メンターは女川町に来町し，対面による交流を行った。）

<発表方法>

- ・オンライン（3人：県内2名，県外1名）
- ・発表に対しての質疑応答
- ・発表に対しての国内メンターからのコメント

数多くの方々に研修報告を参観してもらいたかったが，新型コロナウイルス感染症拡大の影響のため，学年や学級での発表が大きく制限された。

参加者独自の発表会における報告は，延べ4552人に対して行われ，一人当たりの平均人数は89.3人であった。

<発表会の様子>



7 成果と課題

(1)成果

- オンライン開催という形態でも、参加者同士が共通体験等を通してコミュニケーションを取ることができるプログラムを実施することができた。また、前半・後半と分けたこともメリハリが付き、意欲の持続にもつながった。終了後もハウス制度のメリットとして、サマースクール後も国内大学生・高校生が交流する様子が見られた。
- 東日本大震災の被災地「女川町」で復興・復旧に取り組む地域の方々や起業家、行政の方々と交流し、女川にかかる熱い思いを直に感じることで、郷土愛を培うとともに、被災地宮城の復興・復旧に対する興味・関心を高めることができた。(数名の高校生は女川町を訪れ、研修の振り返りを行っていた。)
- 閉会式(出発式)では、高校生全員がこれまで学んできたことやこれからどのようなアクションを起こしていくか起こしていきたいのかを発表し、自己開示することで、その後の行動への意欲付けを図ることができた。

(2)課題, 改善点

- 協力団体であるHLABのプログラムだけでなく、宮城県及び女川町の被災地としてのメリットを生かしたプログラムをオンライン上で企画した。来年度は、地元で活躍する多くの方々との関わりや中高生との交流を対面の形で実現させたい。
- 7日間すべてオンラインという経験したことのない運営となったことから、システムの確認や参加者の意欲の持続などが心配された。途中辞退者は出なかったが、参加者一人一人のフォローの仕方を今後検討したい。
- 新型コロナウイルス感染症流行前は、参加した高校生が所属する高校や各種意見発表会、宮城県青年団連絡協議会が実施している「青年問題研究集会」の未来の青年発表「アシタ宣言」、NPOカタリバ主催の「全国高校生マイプロジェクトアワード」などに自主的に応募し、発表するなど学びを発信する機会を持つことができた。しかし、今年度も感染拡大の影響で、所属校での成果発表会でさえも制限される形となった。閉会式での成果発表の時間をしっかり設定することも含め、多様な機会を用意できるように考えていきたい。
- 県内や地元女川町からの参加者が少ないため、広報する時期や地元高校への働きかけを工夫していきたい。